成形圖說

菜蔬部 二十二

145
30
1

東京圖書館

和書門	農書類	一四五 函	二一〇 架	一九 號	三〇 冊

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用

成形圖說卷之二十二

目錄

芋（イモ）
附海芋（イモ）
薯蕷（ヤマノイモ）
蔓芋（ツクネイモ）
黃獨（ケイモ）
土芋（ホド）

TOKIO LIBRARY
東京書籍館
明治四年五月創立
FOUNDED BY MOMBUSHO 1872
明治八年文部省交付

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

菜部園蔬類

伊毛（イモ）　万葉集歌にはかくこそおきなるが家なる妹をはいかの葉のあらじ又古今集みおしなべて仲哥

宇毛（モモ）　むらゐみ色変はいかの歌のしたもみぢ籠半おどろえつゝ

家津芋（イモ）　和名鈔○津ハ助辞也　里芋（サトイモ）　多識編

白身竹（シミタケ）　露取竹（ツユトリタケ）　以上藻塩草竹七夕ハ書故実ハいとせの義を取て歌を

畠芋（ハタケイモ）　以上並み山芋の形を取て歌を

せ紙動揺葉ハ芋の上乃雫とる今彩れ玉川さに彩端乃

ちぢはをうり蒸ゆ称あるを無意ハや○郷談正音に芋

葉と云ゆ　鶴乃子（ツルノコ）　沖縄上名凡南島人コ

通々利子（ツヽリコ）　多識編○芋子俗

芋子（イモコ）　式内膳

粒芋（ツブイモ）　園子芋ふどゝ云

この属　芋頭（カシラ）　多識編○即芋料せ俗親芋（オヤイモ）と云

名字の芋粥を是より出しゆ

芋　土芝　以上別錄　蹲鴟　史記注芋也蓋芋魁之狀若鴟之蹲坐故也○種芋法云本謂之土芝蜀謂之蹲鴟前漢謂之芋魁後漢謂之芋渠○顏氏家訓云江南有一權貴誤讀本艸蜀都賦注蹲鴟芋也乃為羊字人饋羊肉荅曰謝饋蹲鴟　芋魁　同上○綱目東漢書援神契仲冬日卯星中收莒芋○艸和名引兼名苑芋一名柏芋本經作芋渠渠魁義同　芋頭　救荒本艸　莒芋　又齊人呼芋為莒○本艸ハ為柏芋の説あり　早芋　綱目　家芋　逢原　土芋　名物法言　茄蓮　群芳譜　芋子　齊民要術四邊附之而生者為芋子　渠芋　廣雅　田芋　明屠本畯野菜箋　苗英　郷談正音芋苗芽あり

蕃名カルフスフート　ハニ　エゲイブテ

伊毛とは古、夫婦かてをみ他人にてを男と女と雙べる対をを女を指して云称なり仁賢紀古者不

言兄弟長幼女以男称兄男以女称妹と尺えり字なり妹ハ假夫なり妻を指して妹といひしなどに妹兄と云ふとも出なら今我兄我婦ならでも長者を長兄と称へ婦めを姉と呼ぶが如し又書紀ヨ女子尺えしを土左日記ヨ女子とも称へごとをかむごと云ふこと西洲の俗畧きて東國にて女子を絶て息女と妹と云ふ女弟を妹人と云ふも妹ざるなり女弟ある婦めより出て妹と云ふハ元来已て妹を指せし因なり

遂に芋を伊毛といふハ子生なる義ヨつ事て因さる也繹增墓が熊野紀行ヨ知さる人の許ヨいきされバお因む餐ちんとて碁石筒の大きさなるいもの加しらをとり出てやうそ四そいもの丈いとゑつゞ多乳ハ甘さやはらむといへど人乃子ヨ丈て食せめといひて強嘗ちしゞ云く今常陸越後五畿後国なるみて

芋の子をはをのしく味るを子を生
とゝ云ふ擦き擂き俚言ありとぞ
毎の元旦に芋曼珠芝を牽子孫繁昌乃祝儀なるべし
土佐日記元日の下ゝいそしゆゝめを歯固をなしかゝ
やうの物をかき固せ求しをおかゞと云ゝ按ふ内膳式
を供奉し又大膳式正月最勝王經齋會供養料ふ芋六合
滑海藻二両二分とあり今元旦ふ芋と荒布あるハ饌大
根堅魚節かどに海苔を加へて食ふ國ゝ小の実あ
れど皆芋をは用ひぬ○四民月令云正月可蒩芋
芋に早中晩の属水旱の二種あり○凡
小と矢く長き等の異ふは味乃美惡地道の厚薄に因て
法道回しかゝらず但種ふは二月春分の頃に芋魁を埋
窖ふ出して芽立おき彼日に曝ふ芋乃鉄ざるやうか

し赤尾乃爛さるハ切去て灰を附つゝ蹴區に馬牛の糞
穰を布き上に蔚るあり必恵地を書て宿土を嫌ふ培養
かるを擺ぶかとゞ幸芋ういるふハ木艸の葉土かゞ
持入るとのあれゞを底に畫を他てあるし○早芋ハ七
月生霊會の頃に熟て中ふあるハ八月ふ及て取也早
ふハ鶴児芋てふかのを上等とを茅もきゞれふ名く
鶴乃子とゝこは西土の○一種伸縄ふて芋の大名を
蹲鴟と云ふ相似さを俗言陸
ひき芋ふ子ふく根より蔓のゞと四方へ筋を延してを
ども味を菜芋ぞ
端ふの漢書豈を生に植るを筋を畠ふ漫撒し上ふり
蔕穰糞堆の物を覆ひ置ば中夏の頃ふは既くを豈を引

拔つゝ蔓料を割用て少し薫味あり本艸和名引廣志早
芋七月熟と見えしは即早手芋のことぞ綱目引廣志早
は九月熟と云
字誤
まこそ

赤芋　根莖とも赤色なるをとて云

栗芋　和訓栗芋国俗食鹽云生食甘美不蒸如生栗及烏芋○圖含み唐芋とも出し大和本艸に蓮芋一名栗芋とかるるものみて芋の上品やぶりとる名あり栗はなぶりに煮て蒸と云

都芋　日向京芋とも云白芋奥州わらみて移り南

衣被芋　皮加

黒莖　遠江にて蛭芋と呼べり

真芋　肥後あり

葷乃芋　或頭乃芋とも

紫芋　唐本艸○齊民要術引廣志云淡喜芋魁大如瓶少子葉如散蓋紺色紫莖長丈餘易熟長味芋之最善者也莖可作羹臛肥渋得飲乃下○本艸和名引兼名苑長味芋一名淡善蓋亦紫芋の輩なるべし

徽　玉篇紫芋

赤芋は高三尺ばかりみな尺ばかりもある毛料大莖のかし

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

地深はもく浅ければ苦し此もの黒皮厚く毛多く肉ハ白し絶て黄ふく味柔滑なり子芋ハ生ずがら食ふべし京師近郊ハ隴畝に多くして蒔るもの頗る肥美なり四時共に用ふ農政全書王禎云芋葉加亦中食根白亦有紫者其大如斗荷長而不圓莖微紫乾之則連茄而起宜蒸食亦中為羹瞻東坡所謂玉糝羹者此也煮法宜先用塩微滲則不摸糊

八頭芋亦曰八ロ又親せ芋ぶど云子芋の料ハ畑の四旁ハ圍繞て生ずるなの名なり

此もの魁偉く一頭ハ数芋を生じ名とし莖少鬱く尾細ハて下ハ子芋支出ずるハ○切芋と云ひ料ハ幾ハ切分て灰ハ塗てうゑるものぞ肉赤く粘あるさと

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

餅の如し廣志ニ赤鸛芋ハ即チ連禪芋魁大ニ子少シ比ル ハ頭芋とぞ又百果芋ハ魁大ニ子繁副牧ニ百斛ヲ又百子芋などゝ云ハ切芋の種なるべし

穴芋は皮薄し穴書紀ニ通ル極ル時圃中ヲ一所ゲヽ穴ヲ掘窪て母芋ヲ置カミ名とし大なるハ尺ニ餘ル音頭芋魁極て巨なるハ尺五寸回ニ過てもさゝをみ称し皮薄く味ヲ菲く子少し大偶種爲ニ產るハ高大き く頭巨みて長し大和州ニ法螺芋とて白芋を出ス大さ尺ニ餘る微長し味赤芋乃ち赤芋ハ大如斗魁如杵茲又有魁芋無旁子○農政全書ニ云君子芋ハ魁大ニ子少シと尺ニ餘る蹲頭芋ハ根株大ニ高可ニ四五尺魁大ニ子少シと尺ニ餘る霜芋亦曰島芋蓋ハ芝芋ハ音近一又此芋中の中手なる根芋ハ蓋ハ芝芋ハ音近一又此芋中の中手なる

ヲ芝ニ為ル故ニ芝葉とゆみ淡シ味殼くて人の喉ヲ戟ル此ハ大ク子ハ根ヲ環ヲて多く附ル故薄く毛なし外は黄白色ハ肉白し清人是ハ紙芋卵或ハ芋仍と云中夏の頃出ルものを味よし秋ハ到ヲて子熟れバ稍劣る

ハ能炒ハれて明春に及びて食用ハ供ふ唐本州ニ青芋とあるハ即此ものなり○島芋と根芋芋ハ製法初春圃を掘ハと二尺五六寸馬の糞を厚五寸許布て肥を流ぎ土をかし入てを上に芋頭を稠と排て土を蓋ふ而漸く芋ヲ発ル時節ニ細土を角日を上より振ひ培るハらせざれバ芋の白芝ハ黒斑を生ル故ぞ凡これを

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

掘みは芽の大なるより引取る又冬度しに養ふものは九月十月ふるもせ山田みは島芋を宮るべし芋みは粥の喰の蠶あり

蓮芋 畿内 薑乃芋 西州 揉用る故みは名くく 莖を透莖 伊芋みて芋の莖を云

名かれど蓮芋みて作さる殊み名多し

白芋 細目 素芋 農政全書素芋子不可食莖為植可乾又可藏至夏食之

蕃名ケレイン スペールウヲルテル

此もの種子かし春暖を好て宿根より芽を發し高三尺許み至る子芋を植しハ本年の中みハ長ゝさし莖葉の形をわくて淡縹色かるは制易し又幹の中荷茄のおもれるもとて蓮芋の名を負て生おゝ魚生み傳ひ醋醤に和て食ふ夏秋の交亦一乃佳品を好もの煮は生に及ず○此もの秋乃季霜ふに滋かんとしてみは株の上に穰乃單志つゝ子種みとなるべし冬に埋るはなし、

田芋 水芋並み水田の中に栽るもの乃名也

水芋 綱目時珍云水芋、水田蒔之葉皆相似但水芋味勝莖亦可食 麺芋 南寧府志

此もの東西せみ暖地乃中に蔬るも就は稲田の濕み培へ形青芋に似て莖僅み尺許丈乃末み舊葉より生て味傷ふ勢内みに交て養と次○菊野寺之を嘗る海松嶋ハ風多し此芋は乃田に植て蔬る故風損かし蔬るみは芋の土頭涯を一二分切て莖

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

と一寸許はし切にとれば田みお沒ぬばそのの復芋と成
出沖縄名乃婦女篠と手引てふ金篦を提ぎをて此手引篦は第
葉にえそしフクシ田にて芋此大なるを擇とり引を
篦の歩とおとそなる田にて芋此大なるを擇とり引を
て根髭の四邊を用鋤て引上つ、ふきのは田に殘し置て
三年一收とせみ婦女布帛の縷を染むを色や赤褐みく
千回百紡浣をいへどを脱ぎ偶その莖球吾に採ち
を取て染る時は其色を変さ変性を而に然て且折且染ち
や変回み此芋希しみ石垣留おどみて麻絲を染るみハ
や柿液のみくし絲の白くを染る所は口繋ぎて此中の根を取て
み浸し染るせ幾度洗て引色変るそ毎迫ぬ石此カウ
口の陸に出て是は中此の緒魁みて以沙み為乃登々
仕と仰せしそのとおをそなる狩査紡究て後に云べし

伊毛志延喜式○即芋莖也土左日記
伊云ハ芋魁のおとかるべし
伎受伊ハ虚浮かるを云伎ハ莖の省
伎也芋柄のおゞ乾ざるをまべ
歌和名鈔引唐韻芋莖也

芋柄和名鈔　受伊

芋幹農政全書

芋梗沈活筆談

芋禾屠本畯野菜箋

芋莖の皮を去りて乾るる也霜を經し後ハ皮を剥ぎ及
び今按津和泉大和を江等の國より出るものの色白く莖
もして味絶美し紀中蓮芋乃莖ふく製造るハ皮を剥ぎの
紀後逸莖名高し或いたくれ具とおやり○芋幹ハ赤小豆を入る
羹をゞ汁とぶしは伊毛しの乃煮りて約くるせ○農
政全書云芋幹剥去皮乾之蔬茄中上品又云煮芋汁洗膩

衣潔白如玉○石を穿裂みハ次なして芋莖を石上ゝて焼き
熟小糸て是を鑿鑽也○芋花は色黄く旁に捲葉のゝ長
子夢のゝくを儲めり凡芋斛の一ッるのを三年後て裁き
ば花開て根ハ腐る細目云種芋三年不糸則成根芋○凡芋新を慮收
十種必ず漢名を查究べし且農政全書に載せし芋の諸名綱
目に所引の廣志とハ既に小異あるるの亦あり農政全書州穀芋を綱目
作車轂芋本艸和名作車輦芋又勞巨芋を綱目作旁巨芋
又青浥芋綱目作青邊芋其他雞子芋雞窠芋かと凡そ
者実ハ同種なら○豊後風土記曰大足彦天皇御諱景行遣
んとおもへ汝せ
苑名手治豊國往到豊前國仲津郡中臣村于時日晚偏宿
明日昧爽忽有白鳥從北飛来翔集此村苑名手即勸僕者

遣者其鳥化為餅片時之間更化芋數千許株花葉各榮苑
名手見之為異歡喜曰化生之芋未曾有實王德之感乾坤
之瑞既而參上朝廷舉狀奏聞天皇於是歡喜之有即勅苑
名手曰天之瑞物地之豊艸汝之治國可謂豊國重賜姓曰
豊國直因曰豊國後分両國次豊後國云々○和訓栞曰何
両國古市の一郡ハ芋を生せべ伊勢國三重郡の一村み
ハ生して食ふべからず○續今昔物語に依波洋中み
て南風に飄されて北狄國に漂ひ来し時頭を白巾を
て法ひゝ法を人極て也高くさて不動と云物也芋阪を
食せかぶせりと記せり按ずに牧野の地ハ芋阪を食せ
る國なり且國に有ぬるゆや巴且國

ハ南天竺ヨリ近キ国ニアルガ五穀ハ殆クナク芋類ヲモテ糧トスルハ俗語ニ一ク益ヲ立ズトク就ヒイツヒ有ル人ハ但芋頭ヲ多ク炊イテ食ヒ国家活ヒ居ルト聞カヒ老ヲ養フヒ人ノ食ヒ熱ノ偏国稲米ヲ食セザル者ハ志ヲ守リ此ニカク意熱ノ偏国稲米ヲ食セザル者ハ加ヘ富獣ヲ羅ヲ回ラセル乃俗アルカトイヘヒ巴且杏且國ノ主ハ巴且杏乃変ノ云フベシ

○徒然草ニ和寺ノ法師ハ芋ヲ好ムヒ人ノ食ヒ物ニ盛親僧都ヒテ座ムヒヒ人ヒ智者ヒ人ヒ芋粥ヒ云フヒノヲ好テ多ク喫ヒ人ヒ議ヒ人ヒ座カヒテヒ大ヒ人ヒ様ニ堪ヒ難ク繁ク飲ヒ下ヒ度ヒ食ヒ物ヒ書ヒ読ヒ人ヒ患ヒ事ヒ有ヒ人ヒ七日二十七日カヒ療治ヒテ慰ヒ欲ヒ人ヒ様ニ良芋頭ヒ擇テ多ク喫ヒ万ヒ病ヒ愈ヒ人ヒ食ヒ事ヒ能ク堪ヒ難ク極ヒ苦ヒ人ヒ様ニ思ヒ人ヒ様ニ成ヒ

二百貫ヒ坊一舎ヒ譲ヒ人ヒ坊ヒ百貫ヒ売ヒ京ヒ人ヒ頼ヒ主ヒ十貫ヒ芋ヒ料ヒ足ヒ充ヒ人ヒ食ヒ人ヒ度ヒ足ヒ人ヒ食ヒ人ヒ様ヒ成ヒ人ヒ消ヒ

造城勢作て上下の限らず夕乃食城助志めゝり歳
ごと乃元日の先は供へ始て芽出しき端みつゝひゝる
凡芋ハ冬より春まで味長りて他月ハよろ
しからぬ内膳式の正九十十一十二月のみ供
進するよし載られき周禮注諸瓜匏葵芋為禦冬之具唐
書章仇置成都市誓文云大亂不亂蜀有廣漢大饑不饑蜀
有蹲鴟とゝ又説苑の種芋三十畝省米三十斛種蘿蔔三
十畝益米三十斛則知蘿蔔果能消食とゝ或曰漢
の三十畝ハ本邦の一町歩ゆゑに芋ハ一町歩の積
かゝて芋の石高ゆゑ考るに一段歩の出来芋六十

俵とゝて一町のハ六百俵也是を石に直せハ三斗俵の
積なれバ百八十石となる而米三十石ハ一歩の一升積
かゝて一段のハ三石の出来なれバ一町に三十石なり
因く一町歩乃厥実芋なれバ百八十石米なれバ三十石
と云へばの増倍の著ぞかし因て漢人ハ芋をうゝれバ
米三十石を省き大根を作ればハ米三十石を益にべしと
ハ云ひゝる志のるに芋を米のかく糧とするに朝夕芋
一升を食てハ腹ハ充ざる事なゝぜ絶やゝ所いらて他
比動なゝぜ又一升の米ハ一歩の地よりのる積なれ
ど粗二升なくてハ五合搗みして一升ハ取がゝし一歩二升

毛とつみハ上田からでハ稀あれ二歩の出毛米一升ぐバ二歩みて一升あの積ふして
らし食みてハ怠業せる様みは食飽ざるべし而を芋は
一歩畑ゑ四通作り一畝ゑ科とし一科の芋子二十とゑ
る時ハ芋数四百既あり一升六十既の積かて外ゑ二
升分の芋百二十既食しかむみは農夫は腹鼓をうちて
作をは苦労みは次第しきぞめ四科てゑるゑ一歩の芋
ハ三日乃粮也あり一歩此米は一日の粮とある事まく
芋と米との損益を知ぬべし然ゑ芋は凶荒と為暴風
吹倒とも傷の代物ハ傷ざる也さるみてるかの例
物よりゑ入ハ容易くて但蔵るに地を易ざれぞ出来ね

ろしみ早して熇る年は刈取を霑ひ土を耕うけて他の
傷ぬやうゑ仆猪をるハ志よりかて凡土を劇反れハ地
を熟め暵を遠さぬ為あり土ハ厚てを堅られバ暵とは
里て根を傷て拾遺集の歌みあるか用の土さへ付て思
る日みもわゑ神干やいゑみ例えぞて是妹をて芋
に比無ゑら尖天みは土ハ厚く壅てを堅られバ暵遠を
厚くてゑ柔あれバ芋の根を乾さぬるものをへか
里用てむらしゑ里土ハ劇反してハ熟つゝ他畑の根み
培壅おと茂ゑみはをのしゑる
莖葉氣味冷滑かして鯊毒○主治曝乾焼て性を存

し貯ふべし○小兒の黄水肥瘡を研て搽べし　経験方○蜂螫を生芋に茎ぬりて汁を塗ばその毒解本朝経験○按此方宋冠宗
疏ゞ衍義を出す○凡盃水或は廃井中を土壁にあるを知らずして暗中に手を扶べば土象人の鼻中に入て子と産血
絡て吸て後に艶に乏故に誤て土蠱鼻孔に入らば芋
莖の汁を絞て鼻中に灌べし黄芋の莖又は妙あり凡芋
莖を煮て土蠱を解れば解て驅ち断絶る也按に池法筆談
に此名の強あるを載る○芋卵氣味平滑小して小毒あり○主治小
兒の軟癤を擣て泥の如くし瘡上に塗極て效あり本朝経験
○竹木の尖刺の立るを拔ん家芋一味生おろし研

て痛のまちを附て炙をおこをゝをしばれば槎牙拔
るあり○灸瘡の愈ざるるは里芋根擦小麥皮黒雞卵の
白を以上三味一ッに合せて附べし○凍瘡を治ん黒芋
を焼かし糊に押まぜ附べし○酒刺蟲には銅の鎹骨梅
干里芋以上等分に合せ附るあり但雞卵小く調附べし
○竈塚には里芋硫黄各等分朱少分以上を漆に押合せあり
ぐらに押込て紙を蓋して其上に膠と引てあぶる
堅ふるわゞに炙る○蝮蛇の咬るは家芋の葉番椒
塩椒茱萸味等分細末かし糊にて附るの効は一毒解
紙あり○又方島芋の茎物みて附べし○凡蛇傷は里

芋生黄蘗粉中研くだしにめ附べし○蜈蚣の螫るる
みは里芋の苣接て附べし○蜂の螫るるには芋麩を破
て其の脂を搭て塗べし○み爲芋の汁を附てもよし○
黄芋の苣乃汁附べし苦かき時は根を搭附て亦よし○
又冊椿寮藍葉芋麩以上面味各等分細末にして附べし
○湯火傷みは里芋の汁を研て附べし○み方里芋おろ
黄蘗粉種粉等分合せ藷縷の汁にて練やし紙に看て
やけどの上に附べし○み方里芋末榮種粉三味里芋汁
少し割水に入を粘るる汁によき末茶を入ハラヤ爲
分に入よく練細く附べし○火傷焼物を治るるの法

とか里芋苦竹袴等分黒焼細末かし麻油にて煉豆附べ
し○歯抜抜むと欲やば芋苣三斛の黒焼を搗栗の粉各等分先
歯刷に針を刺て跡に此藥をさしべし針は二三度さし
べし○一切の腫物口開こる時は乾芋の苣葉を一夜酢
に浸し日に乾黒焼にして末とし糊かく紙やしにの冠
麻疹に附る針を忌む所に最よし一歩の中に吸
出し○潰瘍愈葉古手芋椿皮霜上等分粉かし梅酢に合
せ附べし○帽地咬に白ダウ芋の苣汁を絞て塗べ
し○瘭疽和名鈔引集驗方瘭疽血氣否渋而所疼治るに
生也と俗云甲腰膿の類あり
葷芋の白根一味黒焼かし粘飯にて練るくと押合せ附

べし○又方里芋一、味鍋黒少し加へて研合附べし○小兒の侵淫瘡み八里芋小豆粉二味芋を研て小豆の粉を研合附べしそのまゝ汁を吸出して愈る○み里芋一味を揩附るもよし○み方釜墨と豆腐と混播交附てよし上和方○凡芋の蕁子者八蓼葉或八生薑を入て煮一萬方べし毛蕁を消けみ芋、汁の蕁毒氣を中ひる時八燃腫る

石芋相模等の国かゝの名お国弘法大師通み傳て芋と洗ふ婦人の遇へるに之を見て芋逃み毒艸化ひと云ふ此不用の毒艸を大師芋ひと名ひと始ひ変八弘法の寛と云べし

毒芋亦曰大師芋俚諺み曰むらし

芭蕉芋島南

成形圖說卷之二十二

十九

熊坂信濃倍古乃舌東奥牛をべコと云此花牛、舌み似るゆゑ

海芋野芋小者天荷大者以上綱目

蓮早金蓮觀音芋以上花鏡

白花大乙蓮三才圖會一瓣

佛龕花汝南圃史御魁花曆百詠

自生の毒芋ゆの莖深緑みして光澤ありて博物志云野芋小子家芋食之殺人蓋薯也本艸中み野芋八大毒不可啖之よしなれゝ志のるに南島の地此ものゝ多く一ひび荒歉み遇く飢を免れ難ひ時八已むことを得ずして此ものを掘ゆ炒糖み和て煮食ふ故里和其毒み中ゆる者亦少ゆらず唯筆脉腫脹て患ふと云

凡島峙の窮民卒に必歳に遇とき急に本國に飛報し救粮を下切にまでハかいなきものまでを尊ひして葉失露水の命を活るその悠むべき嘗どもこれのみハ限らざる事也し

山津芋　和名鈔○按本艸和名亦同し津と加へ呼ぶハ古の俗語かに○山芋元野産ありし然ども亦園亦自生あり今類を以て此に収入れ

山芋　同上に云

山芋　新撰字鏡○字鏡山伊毛と訓ども尚時既に津と乃と也延へ呼ぶべし

長芋　拳芋小園芋小野芋

膚美芋　東奥

茅芋

自然薯　俗作芋に言ふ

薯蕷　唐本艸

諸薯　和名鈔引弟名苑今按音與署預同本艸和名一名延艸

諸著　吳氏

土諸　異苑○諸或作諸

山芋　山藥

玉延　以上綱目○負暄雜録云薯蕷避唐代宗諱豫改名薯藥避宋英宗諱曙遂名山藥按千金方薯蕷生於山名山藥秦楚之間名玉延志ハ山藥の名宋時に始るに非ハらざ此間藥種に在て山藥と呼ぶ俗に以山藥為別物とと思へ是綱目に歳久しとと思ふるとあり

上茶根　茅茶根　以上本艸和名引小品方

脩脆

山陽　以上同上引釋藥性

玉茅

大餘粮　同上引雜要訣

銀條　德星藥譜

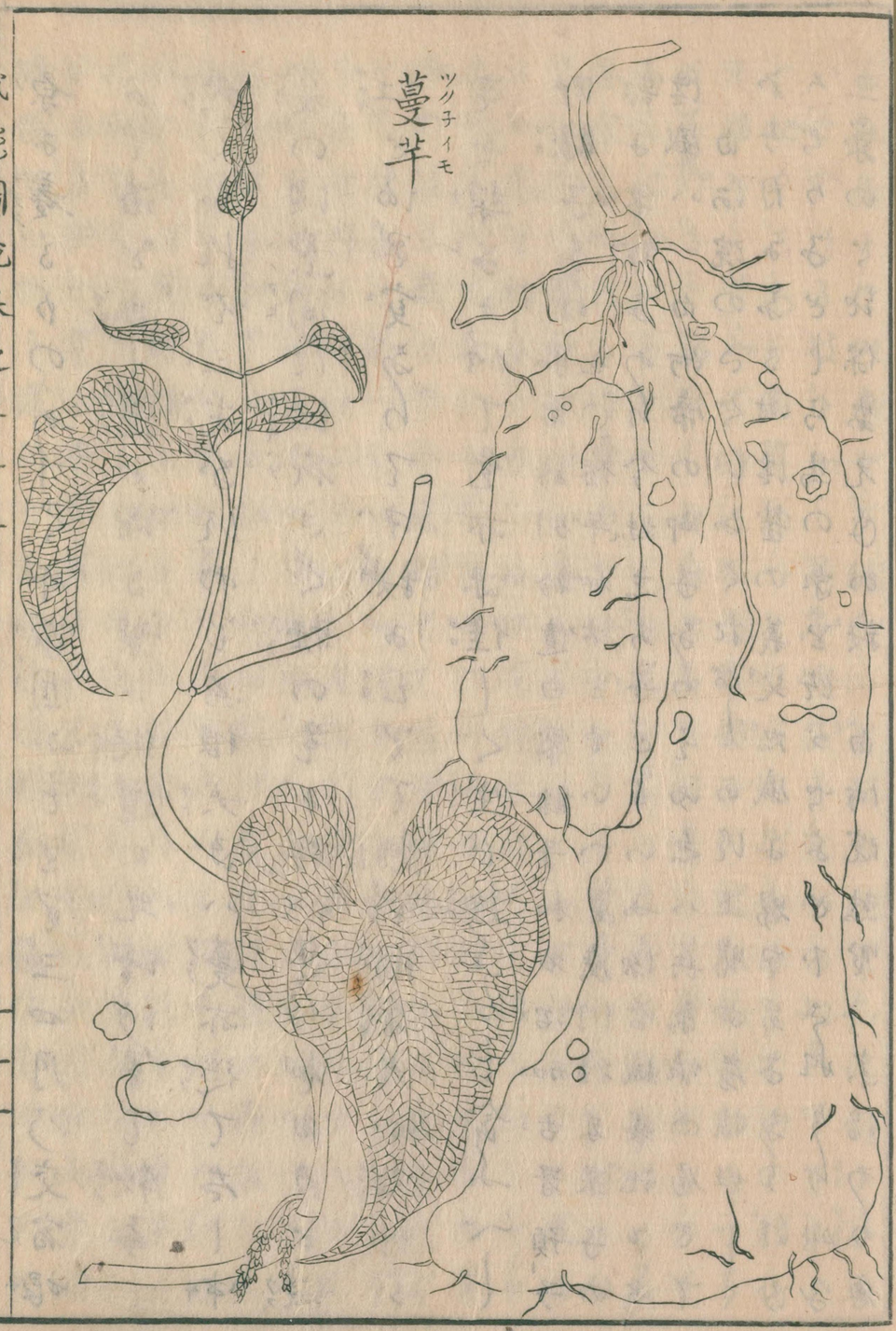
紀艸　救荒本艸

山薯　尺牘雙魚

玉糝

月一盤　以上事物紺珠

山芋は根は更に食ひ食ひ薬ひ皆悪味乃美のと有るぞ性を良とと野藪中乃巨料とするべし本草



国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1
ガラス使用

原に產るものゝ如く亦家園にも植
え置て三四月の交宿根
より芽出て夢と成る葉は縱道の光澤有て軟
老かれば三尖かれて其根大きハ蔓亦從て太し中
夏の頃葉間に細花さく棘の色は頗似たる和白きと淺
紅とあり實ありて中秋に熟して圓扁大小乙如
ぞ色梨子に似て色亦味佳しく生にて熟するを食ふべし
即糠子和名鈔引拾遺曰零餘子和名沼加古署預子
部に零餘子有り也○俗作年加古と也いへり果子の
清盛ハ今妹志子とも云ふ添宗盛裏記に平
白河院の御子なり白河帝の御子なり
ある日清盛の義父忠盛に賜ひ
ん。ぐりとし馬の飼とせ
三泉のゝ地保出元の秋
白河院熊野詣
清盛北面にて供奉せり絲鹿山を越るに侍
いかの法る枝に加へ置修
とれたる忘れ歎覽あり
とてはあせふと仰せ盛零
とて作ひ給ひし女房
あるば池ゞ子とせふと動定を蒙りて
思食忘れさる清盛や次
て一句乃遠歌を仕る
りを枝を
らてやしあひ防
御の法三國とや冬冠賜て
とて清盛と名づく白河院
ふせ給てぞ十二のど
四位の兵衛佐あゞ花族の
人かゝ弟
おとゝぎやと作り君
て鞠を臣國柱揚
乃鞠なぬそ多
るみや一書に秀吉の父
眼院といへる者あり天子乃御眼病を療治しなおらせ

[illegible]

天縱の英才今古を卓絶し學びて[illegible]を伐て超く明國を蓋[illegible]
[illegible]ところ　皇國の威稜を絶域に震[illegible]
[illegible]は[illegible]て[illegible]を量り大なるは迫み漢高祖が上[illegible]
[illegible]韃靼[illegible]を滅し居然として清王室[illegible]
[illegible]民の然[illegible]底[illegible]を[illegible]
[illegible]ざるは自取られしの罪[illegible]
[illegible]子に使[illegible]
[illegible]將[illegible]天子の御寶を[illegible]
[illegible]きしを沖[illegible]
[illegible]の愛狀[illegible]
[illegible]俠忠淺慢伏[illegible]
[illegible]
[illegible]を薩州に配流[illegible]
[illegible]前房公を越後信濃東の[illegible]
[illegible]へ入られ[illegible]
長[illegible]
[illegible]國人の立[illegible]疑懼を懷きて父子[illegible]
[illegible]

どもあるされど新井氏の筆を間信られぬ事もあれば一ちは薩州の清ちゃ
ものを見ゆるを一烈祖の事城近傍
あるを仕つし者居屋と了女の後あるふと記せし意
を係ていへるをや此豊後屋といひし孫方なる附
今をくに比企判官能員の妹丹後屋
しを誤りて迎清水の事と又花實乃
とおしさるなりけり
出し俗ゑ鼻當と称ふ女児輩が采て鼻
あるかそ一奇物なりし綱目集解云結莢凡三稜合成
堅而無仁とはあるものあり
○根ハ四時おろしられど其發芽の節ハ味腆らず二
ハ月掘采ぞよろ大なるハ圍ミ二握ミ迄く長さ四尺ミ
ゆ時ミ細目ミ生山中者根細如指又救荒本艸云生
山野中者葉似家山藥而根極細瘦硬亦名野山藥とある

ハ彼土産志ふるみこそ以間ハ山生ぞ大なるはあるを身
也さて其皮土黄色肉ハ潔白なるもと雪乃おとし性滑
てを美しむりしなら上膳ミ供へし署薯粥ミ名ハ順
鈔離要等ミ載せら宇治拾遺ミいふを粥を利仁乃湯へ事
るミ切ハ三寸也さミ尺ばいもを造ることあり本
邦薯類の大なるもとハ見ひらけ山藥みくもなるべし
粥は連生ハ○根を擦て泥くとあせをとろ汁とい
戒ミ作ら
ふ融盪ふるといふ意あり庭訓往来ミ味汁を云ふ署薯
豆腐ミどいつ山芋酒といふもと品字箋ミ凡大和山城丹波近
江紀伊等に產る山芋ハし中國西州より東陸山形月光

富士那須間の諸地まゝ宜し○凡雲除子を種て三四年を経ば根成る切芋てゝ小根を切て蒔うゝるも今春寸許に切いるを植るにも穴中乃ち穴すまるもの

そ○沖縄の卵芋と称ふあり大さ雞子のごとくにして長し皮を削芋あり○英皮剥去て陰乾さゝる山薬といふ薬のおみ粉とし餌みを熟せるを但切み鋏を忌む鋏刀を縮しい色黒く変る竹刀鎮鍮を用ふべし○山芋の川逆に生て根端は水みを生ゝ分がそまい鰻みを化しはくの凡しさゝ有り性の滑りある理或い化るべし圖書みを署蒲感風水而變鰻見半變者人往々有之さ載ら或俳諧みおなうかゞいげくの里乃いむとせ

成形圖説巻之二十二　二十五

ばさられて富みを世ば焦そら宋朱晦菴山薬詩み怪来朽人妹兄を芋漿にとくゝ宝壤耀瓊英小斷傾筐可代耕豢豹於人儘無分蹲鴟從此不須生雪鑱但使人長健石鼎何妨手自烹欲賦玉延無好語

蚤論蓬蟲蜜與羊羹

氣味甘滑毒なし○主治夢遺みい山芋一斤　蔥白五分　塩少酒みて煮て吃ふ赤水玄珠○又方烏薬益智朱砂水飛各一両　山芋二両を研て糊かし以上の薬末を丸めて多く服簡便○石方ぢみて折傷ゝるみは小黍大山芋小雞子鄰一ッ　女青實中以上四味研合て酢中醤油少酒少入る擂合附子上み浅を貼べし○灸瘡を治ひみハ山芋栗實各等分杉の嫩芽少

右二味擂合せ附べし○目み浮瞽の入るゝは山芋み月
五日み取て橡実各等分に上二味よく〳〵細末かして薫の
陰干して管みて吹入べし○又お目み突目みとも云ハ山芋一味粘くと擦し
傷む所み附薬上み弦を附べし○西瓜或ハ金傷ちどよ
り血走を止るおハ山芋生百目牛房生二以上二味小口切
かして重功のために三日おゞ晒し乾し細末みして
米飯みくヒ一付ゝ用ゆべし○湯火傷みハ山芋一味研
て附べし痕なく愈るなり○又山芋粳粉硯墨三味擂合
せ附べし○又山芋生か奈良漬の糟各等分弦擂合て附べ
し○又山芋朽索焼この二味ちら合せやゝ手数の変に附

成形圖說卷之二十二　二十六

べし○又山芋だ子ちりく芙柏水み出二味芙柏の汁かて
煉調て附べし○乳腫痛恐ふ重ゝ〳〵ざるみ山芋を擂て
貼べし以上和方○八味圓腎氣とゞ一萬紡ハ惰ゝ面色黧黑く飲食せざる及虚労とて
かわるゝ仮多くみ澤ゝ体肉消し婦人ハ轉胞とて小便
塞ゝ澁るゝ山茱萸核を去て肉を取る但小便
澁らぬ核おゞらよし山藥各四白茯
苓牡丹皮中の木を澤瀉各三熟乾地黄八附子炮こしら
但常に久く飲むみハ附子を除き五味子を加よ肉桂二以上細末み麩節い煉蜜み
て搗合て○是ゝぞに丸し毎服十五丸茶ハ廿五丸三十
丸五十丸人の分量疾の軽重を計て與ふべし温ある酒
みて空心み一日に二度或ハ三度を服べし久く服バ元

陽を盛かし精髓を益し血を生し顔を駐め志を壮し身
体健かなる○龍齒鎮心丹心腎不足驚悸健忘夢多怔仲小便精多雜濁出濁精し顔色青さめるを治む遠志心を去て山藥炒熟地黄天門冬心を去て龍齒六両
麦門冬心を去て五味子車前子炒白茯苓心を去く茯神木を去る地骨
皮枸杞根皮也桂心各五両を磨筛て蜜をもて○是わざに丸め
毎服三十丸弟八十丸げ、空心に温さる酒にて煙
湯にて意に任て服す○腎虚補藥鹿茸丸と号く鹿茸五両切て酒に
浸し一夜置く茯苓二両海藻二両研て末にして
五味子二両甘艸二両胡椒一両川芎二両八味細末にふし筛て甘
葛を以て桐子の大さに丸め毎服廿一丸毎日三服温酒

ふて服す白朮を煎し汁を去上澄の○薯蕷除病散薯蕷
五両蛇床子二両續斷一両白朮二両五味子二両甘艸二両胡椒二両黄耆
二両杜仲二両人参二両十味細末して毎服一錢毎日三服温酒
にて服す又百日の間栗の湯にて服すれば腎の虚損を治す
○神仙腎勝圓茯苓二両蹂皮を去て細末にして白朮二両黄耆二両細末肉蓯蓉
二両山藥三両巴戟皮二両鹿茸二両酒に浸し一日陳皮二両甘艸二両
桂心三両丁子三両胡椒一両人参二両蓬莪朮二両乳香二両十味細
末し粥にて拌合て甘葛にて梧桐子の大さに丸め毎服廿
一丸荆芥湯にて毎日三服す発さる腎氣を調へ陽茎を
硬強ならし虚勞傳尻より下腫淋病皆愈る○男子の陰痿

て起らざるほく大あらざる大みして長からざるもして堅加
らざる堅して久しからざる久しして精わらざる精落て冷きみ
小肉蓯蓉鍾乳細みに研る蛇牀子遠志續斷薯蕷鹿茸各等分七味
搗篩蜜ふくめ梧桐子の大さわざ食前に酒にて三
十丸づゝ服おの十日に效見そ百日に仙に通じるの法
あり○又方陰痺丸續斷薯蕷附子遠志蛇牀子肉蓯蓉各等
分を散かし蜜にて小豆ばかりに丸めるおと五十丸○又
小菟絲子圓菟絲子二茯苓二山藥三石蓮肉二細末丸め
湯酒にて五十丸づゝ服べし○又方遠志丸男女七傷陰痺起ざるに
用ふ續斷四兩薯蕷二蛇牀子二肉蓯蓉三遠志二の物を末

卵に和て豆の如く丸め五丸づゝ日に二度服べし○定
志丸丁子桂心肉蓯蓉胡椒堅姜革菱縮砂陶砂以上等分
粉かし酒醋に入合て丸め女陰内に構入るば歓喜にて
胡椒山桃皮堅姜三種を薯蕷とく炒て女陰内に
入べし○鹿角散鹿角一斤清水に地骨皮薯蕷各八三種廿日浸て
細末し二錢酒にて日に三度服おの三種を搗篩ひ散に
し津液に和て玉茎上に傳て陰門に入逢盛振動の藥方
○歓喜藥白玉露男女交會の彼方の是を帛に染て肉
蓯蓉桃毛秋石山藥山藥は酒に浸し粉みして共に散かし
用ふ○加味腎氣圓腎虚腰重く足腫て小便常のごく白茯
成形圖說卷之二十二　二十八

附子常のごく炮て二文

苓皮を去り車前子酒に浸し蒸して山茱萸核を去て山藥少肉を取る砲して乾粉にし
炮澤瀉牡丹皮中の芯を去て割き官桂粗皮を去り牛膝株を去て酒に浸し
炮る熟乾地黄炮て粉にし細に篩ひ蜜に煉て○是をもつて
丸め毎服七丸づゝ空腹にコレウの湯にて服べし○
萬靈丸薯蕷蒜虚勞腹病の藥七日分は十日に服
先蒜一本剥く風をひり
ぜ次に薯蕷大指の大さなるを長さ六寸皮を剥て薑擦
ふて剥る蒜を竹刀にて細に刻つ擂鉢にておろし
る暑預と入合て至極擂和て良酒淫分よろしき量て湯
め飲べし初日は一本二日は二本三日は三本如此次序
に四日四本五日は三本六日二本七日一本次第に減し

中婦とに服べし一日に三度づゝ飲なり
炒杏仁一升或一合香色に炒三種羅の袋に入て酒一斗
五升に入て夏は三日冬は七日を経て絞り蒜を炒様にあ
ぶみ蒜は竹刀にて切て入事をはりに掲爛まるを
入なり是を蒜酒と云諸腹病に
揚に宜し○以上萬安方

一方に蒜三升
皮一升香色に
炒て酒一斗
入て

捧芋字鏡に捧字を手豆久年に已不之訓を字書に捧は
掬なり掬屈掌なり名称なり圖會根状似佛手柑而肥大如攫
此芋根又手しが如くなる
渡者故名之東國には約てつくいなと云
杵芋丈和字多那字智那字に
頭大く尾小く両脚を合
亦大和芋字治芋
銀杏芋かどと呼
手芋
四國形の掌乃如く
名也
芋仙薑○物類称呼に
訪に吉なり山芋を
嶺芋上野
拳芋南島土名此芋頭の手を屈
名く和名鈔に拳屈手也和名古不之之
唐芋津輕
虜美

字鏡に拳字手豆久年と仏る即つく紛と同し正字
通云握手謂之拳非手即拳也沖縄人拳の事をコウシヤ
と云み握拳をなして物を突を手突と云凡南方諸
とンを附て呼ぶ多しコフシヤの米粒の突の鋸屑を納る袋を助ちヤ
又島人の拳術と演習セるみヤ右を吾
みな各二俵を鉤懸て人を中に立雙方より振挙て技乃
多くは竹筒を彫刻に左右の拳に因闘争して衝止るを拳を加て熟生る北
むて八竹筒を彫刻に左右の拳に因闘争して衝止るを拳を加て熟生る北
を決し○拳術ハ和名鈔引唐韻相撫以手加物也和名組討
布之字知字類鈔は拔と又ゆ是今の拳術みて柔術
かどの伝藝を昔より有来を名の異るあり拳術
お近世明人おり伝ゆるなど誇称ハいとつゝあく
蔓芋 廣志蔓芋縁枝生 博士芋 農政全書引風土記
大者如二三升也 博士芋蔓生如鵝卵
掌薯 鎮江府志○綱目蘇頌云江湖閩中一種根如薑芋之
類而皮紫極有大者一枚可重數斤削去皮煎煮食俱
美但性冷於北地者耳彼土人呼為諸南北之産或有
不同故形類差別也是此間のつく紛芋ちゝべし

つく紛芋ハ蔓生みて大和地方の產ハ魁塊ゞして味を
亦絶ゝり今伝ふるみ但肌粗赤色葉薯類より大
みゝく圓し根ハ多を束しゝうして粘滑ある故乃
如し是吾邦の拳芋と同類ふて但南地の產ハ大ふし
て粘氣薄し沖縄海鬼子の南徼ゝく植るみハ園に一ッゝ
穴を掘足踏穰類を入て芋頭を載み切て切口に灰
を塗穰の上に居り土を被おく時ハ一年みゝく大之
圍みとゝゝり早春苗を発し漸く長て樹竹に絶縁きり
莖淡紫みして葉ハ山芋葉乃端尖きるゞし根ハ鬚多
し外土黄色肉淡黄し味ハ粗山芋ハ劣るといへども大

ゆ掬おどに盛み一杯み見事あり○此間のつくゑ芋ハ研爛して煎粘く味甚美味み搗きゝ

主治研擂て泔とゑし湯火傷み附て即愈り

毛芋根芋魁芋のおとくて硬ゝ鬚わるをゝて名市已

何首烏芋或ハ毛芋何首烏とゝいふ

大頭久比米西州

黄獨綱目○明道雑誌云黄獨其根唯一顆而色黄故名○鎮江府志云黄獨莖蔓花實絶類山藥葉大而稍圓根如芋而有微苦

黄精冷齋夜話○山州部別み同名ゝ

苟蔓酉陽雑俎○苟音掘蓋芋の字の訛ゝ芋に回し音ヲ説文みハ地黄と凡ゆ

○邵武志云苟蔓藤葉類薯三月栽夏開細花作穗淡紅色

香薯（ハツシユイモ）

土芋（ホド）

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1　ガラス使用

實乃別生不レ附花形如葯胡麻而圓
黑色周圍有細圓點其點微高

毛芋ハ藤生かして葉宛ら薯蕷か類く稍長く色深し
野生かし園圃中に種藝す栽み搭し引上て晩夏葉間に
花開く暮秋に根成て実着く暖地にて葉に虫を生せ
す而て根圍に大さ斗の如く毛多し外土黄色肉ハ微黄
甘味甚芋に似て粘と称ぶべからざるあり邵武志に穉
と云ふ根を軟し蒸て好食となす○葉鋪或ハ偽
て何首烏と称し蠶ぐと云へり○上總にてハ大
ジクと呼く湯に煮て漬物に供す夕の飯に加て食へ

保度即土芋の字鏡等にハ百部根を富度と訓きれど順
保度ハ本は保度豆良と訓し故に物保度と云蕎名なれ
保度は本男女の陰の名故に根顆に團圞をの此称を脚
以百部白薯の如き点然て○本艸和名に赫魁一名土芋
土卵和名為乃止々岐と訓きば土芋の本名并ソトキ
欲と拾へど赫魁ハ土芋とハ別物あれバ決めがたし

土芋　土卵拾遺以上　土豆細目　土圞兒　地栗荒本艸以上救　土
瓜通雅○王瓜亦土瓜と名く

此もの山林に生じ亦人家に種る有り蔓細く蒸山芋に
似て五葉一蔕に出づ根蔓もく連茄て卵の如き芋許多

も蕃里味甘美ふして亦山芋みゝ〻ら北地奥州多密し
以汁として煮食ふ但使慈を忌とゝいつ里○種八升
芋番名スアルトアツフル農圃六書云香蕷味淡甘大者
如雞卵小者如彈丸種法二月鋤地成溝入種用雞糞灰益
夏開發藤以竹引之十月起土煮頻滚點茶甚妙○嶺南雜
記云土芋形全似芋但味少淡而無香とゝ時珍食物本
草みゝ香芋一名土圞兒とゝ〻ら誤あり

成形圖說卷之二十二終

国立国会図書館　タイトル『成形図説 30巻』 請求記号 145-1

ガラス使用